
ヤマメのお悩み相談

raito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤマメのお悩み相談

【Nコード】

N6424T

【作者名】

raito

【あらすじ】

俺の一番好きなキャラが、『希望の光』では一番遅くに登場となるので、我慢できず始めてしまったぜ！

東方キャラのお悩みを、黒谷ヤマメがクールに答えます♪

優「そんなヤマメで大丈夫か？」

大丈夫だ。問題ない！！

まずは作者のお悩み（前書き）

まず、黒谷ヤマメさんの紹介。

名前 くらだに 黒谷ヤマメ

種族 妖怪（土蜘蛛）

性格 非常に冷静だが、めんどくさがり屋

口調 おばさん口調

口癖 めんどくさい、帰りたい

まあ、こんなヤマメですけど、みなさんよろしくお願いします！
それでは本文へ！！

まずは作者のお悩み

raitoです！

いやー、俺の嫁の出番がずっと先ですので、我慢できず始めました！（笑）

このコーナーは、東方キャラの一人黒谷ヤマメが、ヤマメ以外の原作キャラのお悩みを、華麗に答えるというコーナーです。

ただ、若干毒舌かもしれないけどね…（汗）

また、本編『希望の光』と繋がってるので、分からない人は本編を見てください♪

さて、お待たせしました！ 相談役、黒谷ヤマメさんの登場です！！

ヤマメさーん！ 部屋の中に入ってきてくださーい！

シィ~~~~ン…

……つてあれ？ ヤマメさーん。 ん？ 何か紙が落ちてきたぞ……？

「上から来るぞ。 気をつけろ」

……なるほど。 これはフラグで畏だな！
とすると……下かぁ！！

ガチャ……

「ああ、何だい？ もう私の出番か……」

おおい！！ まさかの普通にドアから入ってくるオチかぁ！！

「上からも下からも出てくるのが面倒になっただけさ……」

期待させといてそれはないでしょ！！

えー……ちよつとしたハプニングがありました、ご本人が登場した
ということでご自己紹介を……

「土蜘蛛、黒谷、陰謀、以上だね」

ちょ！？ まじめにやれー！！

「めんどくさい……」

めんどくさいと言ってもこれはないでしょ！　まじめにやってください……！

「はあ……名前は黒谷ヤマメ。種族は妖怪で土蜘蛛。今回呼ばれたのは作者の陰謀だ」

そうそう、そうやればいい……って作者の陰謀って何！？

「まあ、陰謀は陰謀だね」

分からねーよ！　あ……もういいです！
さっさと次に移りましょう……！！

えーっと……次は本編『希望の光』の黒谷ヤマメについてです。

活動報告にも書きましたが、登場させるのは東方キャラの中では一番遅くなります。

後、手紙（本編第二十一話参照）と口調が違うと思う人がいると思いますけど、一応理由があって、現時点ではネタばれの危険があるので言えません！

「ああ、実はそれはだな……」

言うなー……！　今は言うては駄目だあ……！！

「ネタばれで何をそんなに慌ててるんだい？　馬鹿みたいだね」

馬鹿で結構……！　とにかくは言えません……！！

えー…さて次は、どんな風にヤマメさんがお悩みに答えるかです。
百聞は一見に如かずということで、まず俺の悩みをぶつきたいと思
う！

「お前さんの悩みを聞くなんて、蛙を潰すと同じくらい嫌だね…」

…何かもの凄い酷い事を言われたが、気にせず言おう！

俺の悩みはこれだ！

小説の更新が最近遅くなってる…どうすりゃいい！

「お前さんの知能が低いからだろう。私にはどうすることもできな
いな」

やっぱり酷い！！こんなに真剣に悩んでるのにー！！

「というわけだから、帰っていいかい？」

帰らないで！！せめて何かマシなこと言って！！

「はあ……別に遅くてもいいんじゃないのかい？」

でも…

「じゃあ聞くが、お前さんはこの小説を早く終わらせたいから書いてるのかい？」

ち…違う！！ 俺は常に読者のために想って書いてるんだ！！

「読者のためか…

ならその読者がいなかったら、お前さんはどうするつもりだったんだい？」

そ、それは…

「間違いなく中途半端で終わらせただろうね」

うつ…否定できない。

「今のお前さんの小説は読者がいて、そうやって奮起できるからいいさ。」

逆に読者がいない小説はどうなる？ いずれ書かなくなって止めるだけさ」

……

「お前さんは更新が遅い云々と言っているが、まず小説を書き続けることに感謝するんだね。

私と言えるのはこれだけさ…」

うつ…ヤマメさんありがとうございます！！

と、こんな感じで行きますのでよろしく願いします！！

「はぁ……めんどくさ」

そう言わないでくださいよー！！

次回もこんな感じで言っていたくんですから！

さて今回は、博麗霊夢さんのお悩みです。

次回からお楽しみに♪

「お金以外の悩みだったら、幻想郷が減ぶと予測しておくよ」

こえーよー！！

まずは作者のお悩み（後書き）

また、読者のお悩みや質問等も感想板にて募集中です。

ヤマ」そして、それらは大食いコンビ（ルーミア&幽々子）に食べられますのでご注意を……」

食べられてたまるかあ！！

博麗霊夢のお悩み（前書き）

前回言い忘れましたが、普通の感想も受け付けてます。

ヤマ「普通、最初に言っただけだね…」

以後、気をつけます!!

博麗霊夢のお悩み

さて、今回から本格的に始まりますよー」

「その前に、本編進めたほうが良いんじゃないかい？」

うつ……ヤメさんは相変わらず痛いところ突きますねえ。

「それが私だからさ」

さいですか…。

ま、まあともかく、今回の相談者に来てもらいましょう！

「はい、博麗霊夢です、今日はよろしくね」

「……おい、作者。これは本当に紅白巫女かい？」

はい。正真正銘で博麗霊夢です。

「偽者だろう」

「何言ってるのよ」 私は博麗霊夢よ」
ほら、トレードマークの脇もちゃんと出してるじゃない」

脇「霊夢はもはや幻想郷の代名詞ですからねー。

「さっすが」 作者分かってるじゃない」

「……作者ちよっと」

ん？ ヤマメさん何ですか？

「お前さん…何かしたのかい？」

フフフ…良くぞ見抜いた！

「いや、誰だって気づくと思うけどね…」

ちよっと、50万ほど渡したらこうなってしまったんだ！

「それが原因か…」

はい。それが原因です。

それでは博麗霊夢さん。まず簡単に自己紹介をお願いします。

「私の名前は博麗霊夢です」

現在、博麗神社の巫女をしてまゝす」 いえ」

また、幻想郷で一番重要人物でもあるの」

私が死んじゃうと…何と幻想郷がドカーン！

それでも、日々異変解決に努めてる私ってすごいでしょ」
そんな私にみんな信教してね」 待ってるぞ」

「……私はここまで痛い奴を見たことないね」

ははは……まあ、可愛いからいいじゃないっすか。

「作者、これを元に戻してくれないかい？

さもないと、本当に壁をぶち破ってまで帰らせてもらっよ」

か、帰らないでください！！ 何とかこの子のネジを戻しますから

！！

し……しばらくお待ちを！

数分後……

な……何とか戻せましたよ……。

「まったく、こんな所まで呼んどいて、お金を払わないとどうなるか分かってるでしょうね！」

「元の紅白巫女で良かったよ。それにしてもどうやって戻したんだい？」

お金を渡す前にタイムスリップしたのさ！

「お前さんは、時を。ける少年かい…」

ふっ…そうだと思ってくれ！

さて、霊夢さん。

お金は支持通りに動いてくれたら、ちゃんと払いますので安心してください。

「その言葉に二言はないわね！

よーし！ それでどういうことするの？」

今現在の霊夢さんの悩み事を、ここにいる黒谷ヤマメに打ち明けてください。

そして、その悩みに対しての回答をヤマメさんが答えるということです。

「こんな奴に、私の悩みが解決できるのかしら？」

「まあ、基本は答えるだけだから、解決できないと思ってくれ」

ちょ…ヤマメさん！ 消極的はダメ！ ゼッタイ！

「やっぱお前さんめんどくさいね…」

うぐう！ と、とにかく霊夢さんは悩みを言うだけでいいです。

「そうね……やっぱりこの悩みかしら？ 一応、決まったわ！」

それではお待たせ致しました…。

博麗霊夢さんのお悩みは……これだ！！

<神社の信教が少なくてお金がなくなってるわ！ これも守谷神社のせいよ！！>

「まったく！ 私がどんな苦労してるか、あの神社に分からせたいわ！！」

「幻想郷が減ばなくて良かったよ」

「あんたそれどういう意味よ！」

まあまあ…それでヤマメさんはどう答えますか？

「そうだね……その神社が現れる前は、信教はうまくいったのかい？」

「ま…まあ、今よりちょびつとだけ…」

「うまくいってなかったんだね」

「わ、悪かったわね！」

まあ、霊夢さんの態度は巫女というより、不良に見えた人も多いんじゃないのかな？

「ああん！！」サツ

ひいゝゝ！ ごめんなさい！！

あ、ヤマメさんは続きを…

「……今のその神社に信教が多いことをお前さんは知ってる。知っていながら、お前さんは影で文句を言うだけかい？」

「くっ…そうよ！ 悪い！？」

「文句を言う暇があるなら、自分の信教の仕方等を見直して、立て直した方が私は良い思っただけだねえ…」

「何よ！！ それをやってるけど出来ないから、こんなに苦労してるんじゃない！！」

「…自分のプライドを捨ててもかい？」

「！！」

「実際、お前さんはその神社に見学や、信教が多い理由でも聞いてみたかい？」

「そ、それは…」

「そこまでやって出来ないなら仕方ないさ…」

ただ、自分の変なプライドに縛られて出来ませんでした…は私はどうかと思うね」

「……」

「自分の出来ることを最後まで見つけて行動し、失敗を恐れないで前に進みな…」

つとまあ、私が言いたいことはこれくらいかね…」

はい。ヤマメさん、あり

「ひっぐ…」

え…！？

「ありがと…つちぐ…いやヤマメ…ひっぐ…」

こうやって言ってくれる人…いなかったから…ひっぐ…うれしくて…」

霊夢が泣いてる…だと！？ 夢でも見てるのか！？

「私の考えは的外れだから、あまり期待しない方がいいけどね…」

「それでも…うれしいのよ…ひっぐ…本当に…ありがとね…」

「まあ…どういたしまして…かな？ こう…霊夢」

…と、こうして霊夢は帰ったわけだが、お金はいらないうってき
たぞー！

……なんだ夢か！ 夢じゃない？ 何故だあ！！

「お前さんは本当にめんどくさいね…」

とにかく、霊夢のいろんな一面が見れた一日だったな♪

「別に興味なかったけどね…」

ヤマメさんも♪（^^）

「……もう帰るよ」ガチャ

はいはい♪ お疲れさまー♪

さて次回は、霧雨魔理沙さんのお悩みです。

次回もお楽しみにー♪

博麗霊夢のお悩み（後書き）

弾幕はパワーだぜ！！

ヤマ「似てないし、きもいから止めな」

ちよ！！ きもい余計だ！！

霧雨魔理沙のお悩み（前書き）

「今日は霧雨魔理沙らしい…………ぜ」

おお！ ヤマメさんが最後に”ぜ”を！！

「お前がやらせたんだろう…駄作者」

霧雨魔理沙のお悩み

さてさて、今回はヤマメさんがお悩みに答えますよー♪

「今回”も”の間違いじゃないのかね…駄作者」

ちよ！ いきなり毒舌止めてー！！

「じゃあ、弾幕がいいのかい？」

ど、毒舌でお願いします…。

き、気を取り直して…今回の相談者を紹介します！

「紹介された霧雨魔理沙だぜ！ ヤマメ、弾幕はパワーだぜ…！」

「そうだね…弾幕はパワーと言うことで、作者に凶力なのを…」

止めてえ〜！！ 漢字も怖いからマジ止めてえ〜！！

「冗談じゃないけど冗談だよ。安心しな」

ふう……って冗談じゃない!? 来るな! くるなああ!!

「ハハハ、何だか騒がしくて面白いな」

「基本騒いでるのはこの駄作者なんだがね……」

ハア……まあ、一応落ち着いたということでは……
ん? 魔理沙さん、その手に持つてるポーチは……?

「ああ! すっかり忘れてたぜ!

私の家の近くに生えていたキノコだ! 良かったら食べてくれ」

おお、これはご親切に……って何だかやばそうなのが多いな。

「私はいから、作者が全部食べてくれ」

おおい!! ヤマメさんは人任せっすか!?

「いや、実は食べたことがあるんだよ」(嘘)

最後に(嘘)って載りましたよね!? ヤマメさーん!!

「めんどくさいから、さっさと自己紹介に移ってくれないかい?」

くっそ……絶対後で食べさせてやる……。

それでは魔理沙さん、よろしくお願いします……。

「分かったぜ♪ 私の名前は霧雨魔理沙。

魔法の森に住んでいるごく普通の魔法使いだぜ！

普段はキノコを探したり、紅魔館から本を借りたりと楽しんで生活を送ってるけど、

異変時には、霊夢と一緒に異変を解決するプロでもあるんだ♪

もし、異変が起こったら迷わず私に言ってくれよな♪ すぐに解決だぜ！」

「その割には、嫉妬異変では簡単にやられたと聞いたね」

「あ、あれは仕方ないんだぜ！！

こいしの無意識に飲み込まれたんだから！！」

まあ、あれは仕方ないよな…無意識だから。

「そうそう、無意識無意識！」

「気づいていればやらなかったと思う内容だったけどね…」

そ、そんなことより俺としては気になったことを言ってもいいか！

「な、何だぜ！」

（強引に話題を変えたね…）

魔理沙さんが今まで紅魔館で借りた本は何冊に上ってますか？

「軽く一万冊は超えてるぜ」

い…一万!? そ…それは凄い数を…。

「まあ、これもパチュリーとの友情のおかげだぜ!」

「平均を二十冊としたら、五百回以上盗んだという計算になるね…」

おおー! 凄い回数だな!

「ぬ、盗んでないんだぜ! ただちょっと借りてるだけだぜ! 私死ぬまでのレンタルだぜ!!!」

分かりました! 分かりましたから…。

魔理沙さんは借りてるだけですよね…… (汗)

「わ…分かってくれたら…いいんだぜ…」 ぜえ…はあ…

「良い子のみんなは、ちゃんと借りたものを返すようにしな…」

さて…そろそろ本題に入りますけど、

魔理沙さん、自分のお悩みは決まりましたか?

「決まっただぜ」

それではお待たせ致しました…。

霧雨魔理沙さんのお悩みは…これだ!!

<いくら努力しても、みんなと対等になってる気がしないぜ…>

おつと…これまた深刻なお悩みですね…。

しかし、魔理沙さんは努力してこそ魔理沙さんなのでは？

「でも、私の周りが地道な努力しなくても遥かに強いんだぜ…。
何だか地道な努力を続けてる私がバカみたいで…」

なるほど…それに関してヤマメさんはどう答えます？

「まあ、お前さんの思った通りに決めることだね」

「え？」

ヤマメさん！ 今回軽くないっすか！？
メンドクサイドメ！ ゼツタイ！！

「……細綱『ガンダタロープ』」

え？ ちょ、ちょっと待って……アッー！！（ピチューン）

「さて、私が言うことはほとんどないよ」

「待ってくれ！ 私の思った通りになってどういうことだぜ！？」

「自分で決めろってことさ…」

私が努力のあり方を一から教えても、最終的に決めるのはお前さんなんだからね。

地道な努力が無駄と思つて止めるか、無駄じゃないと思つて続けるか…」

「でも、何か言つてくれても…」

「はあ……今のお前さんがあるのは、その努力が実を結んだからじゃないのかい？とだけ言つておくよ」

「今の自分…」

「これは周りにも言えることさ。

お前さんが思つてる強い奴は、必ずしも最初から強いというわけじゃない。

自分なりに努力して、今の自分を作り上げてる…」。

努力ゼロで強い奴なんて世の中にはいないのさ」

「……そうだよな。最初から強かったら苦労しないよな……」

「だから、私はこの言葉は返つて相手を苦しめることになるかもしれないけどあえて言うよ。

魔理沙、頑張りな……。魔理沙ならきつと努力し続けられるよ」

「ヤマメ…」

とおー！ いや、魔理沙の1UPで助かったぜー！！
しかし…緑の悪魔恐るべし！！

「「……」」

あ……すみません。KYでしたね…。

「私の中ではKYをとつくに越えてるよ」
「私もちよつと…」

本当にすみませんでしたー！！

しかし、今回はどんなこと言っただんですか？
魔理沙がなんだか嬉しそうに帰っていったんだが…

「いつも通りだよ…帰ってもいいかい？」

あ、お疲れ……って待てえ！！

「……なんだい？」

ここにあるキノコ！ 一個でもいいから持ってけー！！

「やだ」

何なら俺が食べさせても…

「細綱『ガンダタロープ』」

ギ
ャ
ア
ア
ア
ア
！
！

「……次回は大食いコンビの一人のようだ」

霧雨魔理沙のお悩み（後書き）

はあ…はあ…死ぬかと思った。

「細綱…」

もう、止めてくださいーい！！

ルーミアのお悩み（前書き）

ハハハ、今回はルーミアを何とか連れて来たぞ！

「ロリコン」

みなさん！ 絶対に違いますよ！！

ルーミアのお悩み

えー…前回、ボロボロにされたraitottす…。

「前回、跡形もなく消したヤマメだ」

消えてませんから！！俺の存在消さないでー！！

「そーなのかー」

こら、ルーミア！まだ呼んでないから出てくるな！

「そーなのかー？」

「もう遅いね…今回の相談者はルーミアだ」

「そーなのだー」
「ルーミアなのだー」

……仕方ないか。

しかし、果たしてこいつに悩みなどあるのだろうか？

「もしあっても適当に答えるから、よろしく」

……まあ、今回はヤマメさんがこう言っても仕方ないな。

「本当はこれからずっと、適当で答えたいところなんだがね」

それは止めてください！！出来れば真面目に8対2の割合で今後とも答えてください！！

「8が適当、2が真面目かい？」

違う！！ 8が真面目で2が適当だ！！

「めんどくさい…」

本当にあなたはそればかりだな！！

「そーなのかー」

「ほら、相談者が困ってるから自己紹介に移りな、駄作者」

適当に誤魔化しやがってー！

「細綱…」

それではルーミアさん、自己紹介お願いします！

「ルーミアなのかー」 よろしくなのかー」

魔法の森でチルノたちと一緒に遊んでるから、一緒に遊ぼうなのかー」

遊んでくれた人種が人肉なら、大歓迎なのかー」
これで終わりなのかー？」

……何とも言えない自己紹介だぜ。種族が人間な人は遊ぶとき用心

しよっ…。

「遊んでる最中に絶対食われるね」

「人肉おいしいのかー♪」

食べるな！…って言っても食べるからな。

「思い出したらおながが減ってきたのだー…」ぐ…

「それなら、ここに新鮮な肉があるから自由に食べな」

おい！！ 作者殺す気か！？

「うん」

即答！？

「いただきますなのか〜」ガブ

ギアアアアアアア！！

「……地獄でゆっくり眠りな」TN

うおおおお！！ 勝手に殺すなああ！！

えゝ…そろそろ本題にはいりまゝす…。
ルーミアさん…決まりましたか…。

「決まったのかゝ」

はい、それでは…（あゝ…血の出しすぎで眩暈が）
ルーミアさんのお悩みは……これだあゝ。

<人間ってなんで生きてるのかー？>

「これが悩みかい…」

「私のお悩みなのかー」

「……お前さんの悩みを私が勝手に解釈するが、人間は生きていても、いずれ自分みたいな妖怪に食べられる運命だから何でだろう…か？」

「多分、そーなのかー？」

「……妖怪と同じように、人間も自分の人生を楽しんで生きてるかな？」

いや、あらゆる種族がそうだと私は思うよ

「そーなのかー」

「そーだと思っただけだね…。」
少なくとも妖怪に食べられるために存在したとしたら、明るく生きていくとは思えないけどね」

「うーん…難しいのかー」

「お前さんには難しい悩みだよ。簡単にあらゆる種族は人生を楽しんでると思ってくれ。」

ルーミアも食べる以外に見つけなよ」

「楽しんむ…：やったのだー」

ヤマメのおかげで、私も食べる以外に見つけたのかー」

「いきなりだね…：なんだい？」

「みんなの笑顔を見ることなのかー」

「それはいい楽しみだねえ」

「わはー」 ヤマメもやってー」

「え…：？」

「ほら、わはー」

「ちょっと、私は勘弁できないかい？」

「わはー」

「いや、だから…」

「わはー」

「……」

「わはー」

「わ……わ……はー…／／／」

「ヤマメかわいいのかー」

なに！？ あのヤマメさんが赤くなっただと！？（しばらく血液不足で意識を失っていた）

写真に撮らなければ！！（ゴソゴソ）

「細綱『ガンダタロープ』！／／／」

うわ！ いつもより強力……ギャアアアアアア！

やっと、ルーミアが帰って終了だ…。

ああ…酷い一日だった…。

「……」ガチャ

あれ、ヤマメさん。いつもの言葉は？（ニヤニヤ）

「帰るよ。糞作者」

あはは……… どんどん俺の価値が下がっていくぜ。
拳句の果てには、死ね作者になるんだろぅな…。

次回は……… ああ、9で有名なコイツか。

ルーミアのお悩み（後書き）

ねえ、ヤマメさん。

もう一度、”わはー” ってやってー♪

ヤマ「二度と存在させないようにするよ……」

す、すみません。調子に乗りました…。

チルノのお悩み（前書き）

本編ではヒロインのチルノだー！

ヤマ「テンションあがってるとこ悪いけど、

マフラーくらいは付けたほうがいいね……」

何故に？ まあいいやー！

チルノのお悩み

さーて…今回はちょっと面白くなりそうだぜ！

「面白いのは顔だけにしてくれないかい？ 糞作者」

あゝ…前回のこと引きずってるんですね…。

前回のことは本当に謝ってますから、せめて呼び方を駄作者に直してくれませんか？

「駄作者でお前さんはいいのかい…」

糞作者よりはマシです！！

「……分かった。”堕”作者」

おお！ 戻った戻った！

ヤマメさん、どうもありがとう！！

（完全には戻ってないんだけどね）

さあ、今回の相談者は…！

「呼ばれて来た、氷精のチルノよ！！ あたいたらサイキョーね
！！」

本編のヒロイン……？キターー！！

「あたい？じゃない！！」

「まあ、原作よりは頭は回るそうだけどね……」

だが、俺の中ではいつまでも？だぜ！！

「だから？じゃないもん！！」

「……作者。無限ループになる前に始めてくれないかい？」

ろつと！ その危険性があることを忘れてたぜ！！
じゃあ、？さん自己紹介を…

「むきー！！ だから？じゃないーい！！」

しまった。無限ループに突入してしまったぜ

「……帰るよ」

そ、それでは、チルノさん！！ 自己紹介よろしくお願いします！！

「ふん！ 分かればいいのよ！

あたいは湖の近くに住んでいるチルノ！

趣味は力エルを凍らせて遊ぶことと、大ちゃんたちと一緒に遊ぶことよ！

？って良く呼ばれるけど、あたいは？じゃない！！

言った奴は、全員凍らせてやるわ！！」

「既に作者が言いまくってるから、凍らせな」

「それもそうね！ 凍符…」

俺はチルノの技を既に全部見切ってるから余裕だ〜　ハハハハハ…

「『マイナスK』！」

ハハハ…！？

ガキン…

「作者は完全に油断したね…。

絶対零度の温度は避けきれぬわけもない。

…そんなことより今ので室内が寒くなったね。一応、マフラー持ってきて正解だった…」

「あたいったらサイキョーね！！」

はあ…はあ…何とか溶けたぜ…こんちくしょう！

「ふん！ 思い知ったか！！」

くそー…チルノごときに負けるとは…

「お前さんが単に弱いだけじゃないのかい？」

ふっ…作者である俺が強いわけないだろう。勘違いされたら困る！！

「完全に開き直ったね…この墮作者」

えー…とんだハプニングがありましたか、いよいよ本題に移りましよう♪

まる…チルノさん。自分のお悩みは決まりましたか？

「えっと…う、うん…」

それではお待たせ致しました…。

チルノさんのお悩みは…これだ！！

<ユーヤが鈍感でまったく気づいてもらえない…>

「？ 何に気づいてもらえないんだい？」

「えっと…その…／／／／」

そっか、ヤマメさんは知りませんでしたね。
チルノは赤池優也って外来人のことがす…

「ち、違うもん！！ 好きとかそういうもんじゃないもん！！／／／」

「なるほど、好きってことだね」

ご名答。それで積極的にアピールしてるけど、未だ気づいてもらえないという。

「……／／／／」

「うーん…難しいね…。私はどう答えたらいいんだ…？」

いつも通りでお願いします！（ー）

「当たり前のように私に託すな。その顔を変形させるよ」

ひいゝ！！ すみません！！

「……チルノ。アピールはするが、告白はしないのかい？」

「し…仕方が分かんないっていうか…
は…恥ずかしいっていうか…」

とにかく、出来ないっていうか……／＼／＼」

「……こういう鈍感な奴はストレートに言った方がいいと思うがね」

その”好きだ”の三文字がチルノにとっては遠いんですね
また、振られることも少し怖いっていうのもあるかな。

「……／＼／＼」

「そうかい……お前さんは本当はそいつのことが嫌いなんだね」

「え……？」

「お前さんの言い訳聞いてると、
そいつが嫌いだから、告白を躊躇ちゅうちうしてるようにも聞こえるよ。

仕方が分からない？ 仕方なんて彼の前で好きって言えばいい。
恥ずかしい？ お前さんがそいつのことが好きっていうのは本物
なはずじゃないのかい？
なのに何で恥ずかしがる必要がある？

出来ない？ それは嫌いだから出来ないんだろう？」

「……っ」

「はあ……お前さんの悩みは、嫌いな奴についてか。
正直、何を答えればいいか分かんないね」

ちょ……ヤマメさん……。

「違う……」

「ん？ 何が違うんだい？ 事実だろう？」

「違う！！ 私はユーヤのことが嫌いじゃない！！」

「……………」

「あたいは…あたいは…ユーヤが大好きだもん！！
嫌いなんじゃない！！ 大好きだよ！！」

「…………ふふ…これなら大丈夫だね。本番の時でもちゃんと伝えそうだよ」

「え？」

なるほど…ゆ・う・ど・う・か！？

「チルノ、酷いこと言って悪かったね。

ちゃんと告白が言えるようにしておきたかったんだ。

最初のお前さん、言えそうな雰囲気じゃなかったし…」

「う、うん…今みたいには…言えなかったかも…」

ヤマメさん！ 俺の質問は無視ですか！？

「告白して振られるってお前さんの気持ち分からもない…けど
やらないで後悔するより、やって後悔した方が良い…。
お前さんはそのことが本当に好きなんだから…」

「うん…」

「そいつの鈍感な、お前の気持ちを伝えて壊しな…。お前なら出来るよ…絶対にね」

「うん！ ありがとうヤマメ！ あたい頑張る…！」

「私としても応援してるよ。チルノ」

「…っでチルノは帰ったのはいいんだが、お前さんはいつまでいじけてるんだい？」

ちえ…どうせ俺はKYですよ。

「…ほっておいて、そのまま帰るか。」

付き合うのもめんどくさい…」ガチャ

どうせ俺はシリアスブレイカーですよ…。

「…次回も同じ妖精か」

チルノのお悩み（後書き）

ヤマメさん。今日は多く語りましたね♪
もしかして人の相談に乗るの楽しくなってる？

ヤマ「別に……」

実はデレて……ギャアアアアア！！

大妖精のお悩み（前書き）

今回は大ちゃんだ！ 俺の助手だ！！

ヤマ「さぞ、いい迷惑だね」

な、何とでも言えー！！

大妖精のお悩み

本編と外伝が進められず嘆いているが、こっちは進められるぞー！
だって、ヤマメさんは俺の…

「突然吐き気を覚えたね…」

ま、まだ言い切ってますんよ！！
それに想像だけで決めるのは止めてくれません！？

「じゃあ、なんて言うつもりだったんだい？」

もちろん……嫁。

「……………」ガチャ

ちょー！？ まだ相談してないのに帰らないでー！！
謝ります！ 謝りますから！！

はあ…はあ…何とか連れ戻せた…。

「次言ったら、もう来ないよ…」

分かってますよ…もう、神に誓っても言いません…。
えー…さて、今回の相談者は…

「大妖精です！ よろしくお願いします！」

大ちゃん！…いや、ワンダーソンくん！！
久しぶりだなあ〜♪

「え…えーっと…う、うわ、久しぶりですね！」（汗）

「この堕作者に乗らなくていいよ。
言ってることも訳分らないしね…」

「の、乗らないと傷つくかな…って」

おお…！ ヤマメさんとは違い大ちゃんは女神に見える…！
優しい妖精だ…もしかしたら告白したら付き合ってくれるかも…！

「そ、それはちょっと…」

うお…！ 断れた…！ 俺の心は傷ついた…！
そっか…大ちゃんは俺のことが嫌いなのか…。

「え、えーっと…」

「何も言わなくていいよ。そうやって同情させる作戦なんだから…」

チツ…何で分かった？

「適当に言ったらボロだしたね…」

「ははは…」

あつ……くっそー嵌められたー！！
ヤマメっちに嵌められたー！！

「大妖精。作者はどうでもいいから、自己紹介始めて」

それ俺のセリフだ！ 勝手に…

「スぺカ発動するよ…」

始めてください！

「こ、こんにちは！

私に名前はありますが、みんなからは大妖精または大ちゃんって呼ばれています。

種族は妖精で…うーん…特徴は特にありませんけど、とにかく大きい妖精です。

普段は魔法の森や霧の湖でチルノちゃんたちと楽しく遊んでいます。ただ度の過ぎた遊びも多々あって、人に迷惑をかける度に私が謝っています…。

えっ…あまり特徴を持たない私ですけど、どうかよろしくお願いします！」

「やっぱり礼儀正しいねえ…」

まったくだ。ヤマメさんと違い本当に礼儀正しい！

ヤマメさんにも見習ってほしいところだ…とは言っても、

「無理」

ですよ〜…。

まあ、それはさて置いて…大ちゃんに質問いいかな？

「はい。何でしょう？」

度の過ぎた遊びって例えば？

「は、はい…。一番だったのは風見幽香さんで…」

ま、まさか彼女の聖域に入り込んだのか！？

「それもそうなんですけど、

たまたまそこで寝ていたところに、チルノちゃんたちが顔にラクガキを…」

は…はああああ…！！？

「命知らずも限度があるだろう…」

そ、それでその後は…？

「その後は……すみません」ぐす…

「泣くほど辛い目にあつたのか…」

こ、この辺で聞くのは止めましょう！

さ、さて、そろそろ本題に移ります。

大ちゃん決まりましたか？

「は…はい…」ぐす…

そ、それでは大ちゃんのお悩みは…？

< 風見幽香さんに会ったびに大変な目にあつてます…>

…予想はしてた。

「私も何となくは…」

「どうすればいいん…う…うわあああん…！」

あ…拳句の果てには泣いちゃったぞ…！

ど…どうすればいいんだああ…！

「うわあああん!!」

どうしよう…どうしよう…!

どうする?ア。フルッ

「ここまでKYな奴とは思わなかったよ…墮作者」

仕方ないじゃん! ギャグでもやらないとこの状況は打破できん!!
それにヤマメさんも、落ち着いてないで大ちゃんを何とかしてー!!

「……」ナデナデ

って何ナデナデしてんっすか!? そんなんで落ち着くわけが…

「ひっぐ…ひっぐ…」

あら…? 少し落ち着いた…?

「大丈夫かい…?」

「はい…少し…ごめんなさい…ひっぐ…話せない状態で…」

「今は何も話さないでいいよ…」。

大変な内容も風見幽香に直接聞いてみる…。

後、止めさせるようにも…」

やっべー!! これはヤマメさんに死亡フラグなのか!?

…ってうわああ!! ↑ピチューン!!

「だから今回は…私の胸で思いっきり泣きな」

「ふえ…?」

「まだ、泣き足りないんだろう?」

「い…いいんですか…ひつぐ…」

「慰めにはあんまりならないけど…」

「しょんにゃこと…ないです…うわあああん…!」

「よしよし…」ナデナデ

「ひつぐ…ありがと…ごじます…ヤマメさん…」

「すうー…すうー…」

「ふう…疲れて寝ちゃったようだね…」

「なんか今回…自分じゃ考えられないこと言っただねえ…」

”私の胸で思いっきり泣きな”…ねえ♪（ニヤニヤ）

「……おい、堕作者。どこまで見てたんだい?」

最後まで〜♪ いやー…目に眼福っすよ〜♪

「その目を潰そうか…?」

いや…ヤマメさん…怖いこと言わんという…。

そ、そういえばヤマメさんは帰らないんですか？

「大妖精が起きたら帰るよ…」

…何で俺以外はこんなに優しいんだ？

「お前さんはめんどくさいから…」

へえ…優しいのは認めるんだ…」

「別に…」

ヤマメさんもしかして…クールド…

「細綱『ガンダタロープ』」

あ…オワタ。

次回は門番…ピチューン！

大妖精のお悩み（後書き）

最初のヤマメさんのプロフィールってもしかして俺に対してだけ？

ヤマ「うん」

…今の即答でめっちゃへこんだよ（涙）

紅美鈴のお悩み（前書き）

果たしてあの門番は来るだろうか…？

ヤマ「もう来てるよ」

寝坊しなかっただ！？ バカな！！！！

紅美鈴のお悩み

さて、今回もヤマメのお悩み相談が始まりましたよー♪

「私としては始まってほしくないんだがね…」

またまた♪ 本当は始まってほしかったくせに♪

「壁にめり込ませるよ…」

毎度のことですーセンー！
でも、本当は嬉しいくせにそんなで…

ドカアアアアン！！

なくても…いいでは…ないか…（ボタン）

「はあ…」

えー…死にかけました…。

ヤマメさん…本気で殴りましたよね…。

「いいから早く相談者呼びな…」

はい！ 今すぐ呼んできます！！
こ…今回の相談者は…

「紅魔館の門番を務めてる紅美鈴ほんめいりんです… ってさっきの音何だったんです？」

「私が作者を思いつきり殴って壁にめり込ませた音だ。消えなかったのが何とも惜しかったがな…」

俺は人間だからね！！ 気体とかじゃないからね！！

「は、はあ…」

とにかく、今回は中国で有名な紅美鈴くれないみずさんです！

「どっちが本名なんだい？」

「どっちも違います！ 私の名前は紅美鈴ほんめいりんです！！」

あれ？ そうだっけ？

「そうです！！」

まあ、いいや。

ヤマメさんにこれ以上殴られるのは勘弁だから自己紹介よろしく♪

「良くないです!!」

「私の名前はほ・ん・め・い・り・んです!!」

けして中国とか紅美鈴とかじゃありませんので覚えてくださいくれないみずすね

!!

普段は紅魔館の門番をしていて、これまで侵入者を許したことはありません!

主のレミリア様に絶対な信頼を得ており、もともと重大な門番という仕事をくださいました…。

紅魔館に侵入しようと、この紅美鈴がいる限り先には進めませんよー!!」

うんうん♪ 名前以外は嘘ですね♪

「え! な、何で分かったんですか!？」

咲夜さんが教えてくれました♪

いつも仕事中で寝てる、いつも侵入者(魔理沙)は許す、レミリアは門番を変えようかと思ってる…って♪

「さ、最後は何ですか!？ 前二つは分かっていますけど、最後は初めて聞きましたよ!!」

ただの予想ですよ♪ 気にしないでください♪

「な、何だ…あなたが勝手に作ったただけでしたか…。良かった…」
ふう…

実は咲夜さんが似たようなことを言ってたんだがな…（ボソ）

「紅魔館の門番が変わるのはそう遅くないかもね…」

さて、そろそろ本題に移りたいと思います。

めーりん（一応そう呼ばないと…）さん、悩み事は決まりましたか？

「はい！」

そ、それでは…（えらい元気だが本当に悩みか？）

めーりんさんのお悩みは…これだ！！

<私の名前を呼んでくれる人が少ないです…（涙）>

うんうん。前回の赤ちゃんの比にならないくらい軽いですね。

「…そうだね」

「私としたら真剣な悩みなんですよ…。何か打開策をください…」

打開策を言うのはヤマメさんの気分次第かな？

「基本私は答えるだけだしね…」

「そんなこと言わず何とか…」

うーん…難しいっすね。

「…作者。今回適当に答えても良いかい？」

もちろん…今回は良いよ」

「ちょ…適当って…」

「まず服装と帽子？ を変えたほうがいい。

私の考えだと、それで中国って呼ばれてると思うね」

「な！？ そ、そうだったんですか！？」

「それで駄目だったら、門番の近くに”ほんめいりん”って書けばいい」

「な、なるほど」

「それでも駄目だったら、自分の名前が言われるまで随時、異変を起こしてみたらどうだい

「？」

「うおおおお！！ それは名案ですよ！！」

ま、マジでやるんじゃないだろうな…コイツ。

「っとまあ、これは土蜘蛛の独り言だから聞き流しても…」

「何言ってるんですか！！ 凄い打開策ですよ！！」

うおおおお！！ ありがとうございます！！」ボタン

”これで名前で呼ばれるー！！”

こっちまで響いてるっーの！

しかしヤマメさん…良かったんですか？

「何が？」

仮に中国が異変を起こしたとしても、異変解決組みにやられるのは
目に見えてますよ…。

その時、誰に唆そそのされたって聞かれたら…

「私が言ったのはあくまで独り言だから、私は関係ないね」

そっという問題なのか…？

「飯に大勢で来たとしても逃げ切る自身はあるしね…」

え？…ヤマメさんって逃げ切りタイプ？

「どうだろうねえ…。勝手に想像しておいてくれ…」ガチャ

あ…お疲れさん。

”私の名前はほんめいりんです！！”

…何か聞こえたが…まあいいか。

次回は……………D長です。(ボソ)

紅美鈴のお悩み（後書き）

咲「へっ…その土蜘蛛に唆されたと…」ズサズサズサ…

め「ギャアアアア！！ 咲夜さん止めてー！！」

咲「お嬢様の許可なく異変を起こさないでちょうだい」ズサズサズサ…

め「ギャアアアア！！」

十六夜咲夜のお悩み（前書き）

今回はいろんな意味でやばいから気をつけろ！！

ヤマ「主にメイド長の頭が」

咲「へっ…」ニコニコ

十六夜咲夜のお悩み

さーて…今回はちょっと大変になりそうな予感だ。

前回、ヤマメさんが大変な死亡フラグを作ってしまったからな…。

「作った覚えはないんだがね…」

いやいや、中国に異変を唆したじゃないですか…。

前回の後書きで分かるように、その後中国は大変だったそうですよ…。

「すぐ帰ったから見てないが、誰かにやられたんだらう?」

ご名答…そして今回はその”誰か”なんですよ…。

「…唆した私が危ないつというわけか」

まさにその通り!! だから余裕ぶっこいでる場合じゃないということだ!!

「……そうだね。既に墮作者の後ろから迫ってるしね」

やっとなんて…え?

ズサズサズサ!!

「外れね。まあ、次は仕留めさせてもらっけど」

…って外れてねーよ！！　もろに俺の背中に刺さってたよ！！
お前の目は節穴か、このピー・エー・ディー長！！

ズサ！！！！

「何か聞こえたわね」

いつてー！！！！！！

「確か十六夜咲夜だっけ…今回の相談者だ。それじゃあ帰る」

あんたはもろに帰ろうとするな！！

「そうね。今回はあんたに用があるのよ土蜘蛛…。
勝手に帰られると思わないで」

「じゃ」ガチャ

”じゃ”じゃねー！！　だから勝手に帰んなー！！

「無視して帰ろうとするなんてね。
いいわ。思い知らせてあげる……。」

紅魔館の「

PAD長もPAD長でここで暴れるなー！！

ズズズズズズズズズズズズズズズズサ・・

ピツツツチューン×100回

ぜえ…ぜえ…

やっと…ヤマメさんを…戻した上…咲夜も…落ち着かせた…ぜえ…。

「真に死亡フラグを作ったのは堕作者だったみたいだねえ…」ヒヨイ

ええい、うるさい！！ あんたのせいで俺がとばっちりを受けたわ！！

「作者が余計なこと言わなきゃ良かったんじゃないのかい？」ヒヨイ
それはそうだが…って咲夜も止めい！！

「…何で見てないのにかわせるのかしら？」シュ

「土蜘蛛だから」ヒヨイ

「答えになってないわ」シュ

「どうもありがとう」ヒヨイ

「褒めてないわ」シュ

「知ってる」ヒョイ

ああ…何か今回は死亡フラグが飛び回ってるよ…。

えーっと…咲夜さん。そろそろナイフを投げるのは止めて自己紹介してくれませんか？

「まあいいわ…これが終わったらあなたを片付けることにしましよ
う」

「…」勝手に」

「私の名前は十六夜咲夜^{いざよひさくや}。紅魔館のメイド長を勤めております。
普段は掃除、家事、メイド妖精の指示、侵入者の排除、お嬢様の
世話…

お嬢様というお方は紅魔館の主で吸血鬼のレミリア・スカーレッ
ト様です。

お嬢様はとても可愛く、美しく、カリスマに溢れ、容貌が反則的
でうー、それにて」

少し落ち着こうか…。

いかに主が可愛いからって…

「違うわ。可愛く、美しく、カリスマに溢れ、容貌が反則的でうー
、おそ」

分かった分かった（最後、何か危なくなかったか？）

いかにそれだからと言って、何で途中からレミリアの紹介になっ
てんだ？

「どうしてもお嬢様の魅力を伝えようと…」ポタ…

！？

「あら、失礼…」ポタポタ…

は…鼻血！？ まさか藍と同類か！？

「そういえば、今頃お嬢様は何をなさっているのでしょうか？」

いつもなら、お嬢様にアーンをしたいと思う時間なんですが…。

仕方がない・・・なら明日は私が口移しをしたいと思う時間に…」

ダラー…

「……………ここまでとはね。今頃、寒気でも覚えてると思うよ…あの吸
血鬼…」

「な、何かしら…急に寒気が…」ゾク…

えー…咲夜さんの鼻血が止まったのでそろそろ本題に入りたいと思
います。

咲夜さん、悩み事は決まりましたか？

「後でお嬢様と一緒に…」ボソ…

おーい…咲夜さん。

「ハッ！…もちろん決まったわ」

「正直、このメイドの悩みには答えたくないね…」

ヤマメさん…帰らないでくださいね…。

「チツ…」

そ、それでは咲夜さんのお悩みは…これだ！！

<お嬢様の最近の私の評価が気になっています>

「…………私にどうしろと？」

咲夜さん…今の状況を話すコーナーじゃありませんよ…。

「あら、まだ続きがあるわよ」

え？

<でも、少し聞きづらい>

まあ…ね。

「更に続きが」

またかよ…。

<理由はお嬢様が気になって仕事に集中できず、その度に怒られてるから>

えー…いくつか突っ込んでいいか？　まずなぜ分けた？

「一気に出したら困るじゃない。主にお嬢様が」

いや、別けてやられる方が困る！

それに、あんたのお嬢様は見てませんよね！？

「何言ってるの…運命で私のことを見ているわ」

んなわけあるかああ！！

「仮に見てるとしたら、お前さんの頭に困ってるよ…」

次に原因が分かってるなら直せよ！

「それが出来たら苦労しないわ。だってとても可愛く、うつ

それはもついい！！

「重要なことを超えたね…」

最後に…悩みを分かりやすく一つにまとめろや！！

「お嬢様が好きで溜まらない」でいいだろ！！

「そ…そんなストレートには言えないわ・・・／／／／」

どの口が言うんだー！！！！

まったく、疲れるから新たに突っ込ませるなよ…。

「作者乙…って私はこれに対し答えないといけないのか…」

ヤマメさん。今回だけは認めます。一言二言でまとめてください。

「了解…コホン。」

お嬢様はここまで自分のことを思ってくれてるあなたのことが好きですよ…きつと（多分）…」

「何でそんなことを言えるのかしら…」

「現に私は能力で検証済みです。恋の病は伝染するものと…」（嘘）

「えっ…じゃあ」

「大丈夫です。私が保証しましょう」

「お嬢様とあんなことやこんなことが出来ると…？」ポタ…

「はい」

「おおおお…お嬢様——！！！！　今、十六夜咲夜が向かいますよ——！！！」シュン

時間を止めて帰ったか…。

はあ…正直めちゃくちゃ疲れた。

「敬語がめんどくさかった…」

…じゃあ何で使ったんですか？

「敬語の方が説得力があるから。でも、次からは二度と使いたくないね」

ははは…なるほど…。

でも、また何か死亡フラグが出来そうな予感なんだけど…。

「私じゃなくて、作者に集中するみたいだね…」

そうなんだよな…。

某主人公で言うところ…不幸だああああ！！！！（ボタン！）

「墮作者は大変な死亡フラグを貰ってしまったとさ。
さて、次回は図書館の司書だ」

十六夜咲夜のお悩み（後書き）

咲「お嬢様好きです」キリ

レミ「えっ……いきなり何」

咲「そして頂きます」

レミ「ちょ！？…咲夜どうしちゃったの！？

何で押し倒して……ってど、どこ触ってるのよ!! / / / / /

咲

「うー！／＼／＼／」

小悪魔のお悩み（前書き）

今回もヤマメさんがフラグを作っちゃいます！

ヤマ「作者に集中するね…」

いや…今回はヤマメさんに集中します♪

ヤマ「？」

小悪魔のお悩み

えゝ…前回の相談者で大幅なエネルギーを使ったraittoです…。

「使いすぎて喋れなくなったヤママメだ」

……そう紙に書いてはいるんですけど、普通に喋れますよね？

「もちろん。帰れば」

相変わらずだー…。

つか、そんなことしてると無口キャラになっちゃいますよー…。

「ここではそれでいい」

そーですか…。

まあ、時期に元に戻ると思うので先に進めましょう…。

「……」コクコク ↑頷いてる

そ、それでは…今回の相談者は…

「小悪魔です！ 今回はよろしく願いします！」

おー！ まさに小悪魔的な可愛い笑顔で挨拶してくれてありがとう！！

「か、可愛いなんてそんな…」

いや、マジで可愛かったです！ ゲッジョブ！！

「作者、顔がKIMOI」

そこおお！！ きもいとか書くなああ！！

「えーつと…」

ああ…ここで紙を持って会話してるこの人が、相談に乗ってくれる黒谷ヤマメさん。

「あ、初めまして！ 今回は宜しくお願いします！！」

「よろー」

ヤマメさん……いかに書くのがめんどくさくなってきたからって省略するもんじゃ

「墮。早く進めろ」

拳句の果てには作者抜き！？ って何その”墮”！？
酷い！ 酷すぎるー！！

「五秒後。ガンタダ」

うー！！ それではこあさん自己紹介宜しく…（涙）

「あ、あの… 大丈夫なんですか？」

「作者の心はゴキブリ」

「なるほどー、それなら大丈夫ですね♪ それでは自己紹介します
！」

何を理解して大丈夫とー！？

「私に名前はありませんけど、周りからは小悪魔、それがこあって
呼ばれてます♪

普段は、本の管理、整理や、パチュリー様に紅茶を淹れたりして
ます。

そんな平穏な生活を送っている私ですけど、皆さんどうかよろし
くお願いします！」

あゝ…ゴキブリかあ…。はっきり言って落ち込んでマース…。

「あのー… 終わりましたけど…」

あ、ご苦勞様。さて

「あ！ そっいえば紅茶持って来てたんですた！」ゴトン

……持ってきたのは良いんだけど、何で岡持ちなの？（出前するとき用いる箱のこと）

「運びやすいからですけど？」ガララ……

……そーなのかー？

「そうなんです」冷めないうちに飲んで……うわー！」

ガシャン！！

だ、大丈夫？

「す、すみません！！　すぐ片付け……キャアアアー！」ズル

そして滑ったー！？

「……っと、大丈夫かい？」

「は……はい、すみません……」

もしかして……いや、もしかしなくてもか……。

……天然でドジっ子？

「はい、そうなんです……。実は私の悩みがそれで……」

<自分の天然とドジに苦勞してます…>

「本当にこれには自分でも苦勞してるんですよ…」

なるほど…これは苦勞しそうですね、いつの間にか話し始めてる
ヤマメさん。

「そうだね…。今の状態に気づかないで話してるくらいだしね…」

「あ…／／／」

現在、ヤマメさんがこあさんを倒れないように抱きかかえています」

「す、すみません！／／／」

「別にいいんだが、そんな勢いよく立つと…」

「うわ！！」ズル

「…っと、こうなるだろう？」

今度は前屈みにこあさんが倒れ、抱きつく格好になる」

「すすすすみすみすみ　／／／／」

「謝るのは後でいい…。

私も協力するから、その状態で少しずつ立ってみな」

「は…はい…／／／」

ヤマメさんのアシストで少しずつ二人は立ちあが

「作者、うるさい」

(…・ω・…)

「……もう立てたから離れてもいいかい？」

「あ…はい、ありがとうございます…／／／」

…その優しさを少しでも俺に分けてくださいよー(涙)

「無理」

(…・ω・…)

「さて、確か自分の性格に苦労してるって言ってたね」

「はい…そのせいで周りに、特にパチュリー様に迷惑ばかりで…
さっきもヤマメさんに迷惑かけて…」

「それを意識しないでやってみな」

「え？」

「失敗したら迷惑になるとかそういうことは考えないで、
そうだね…楽しいことでも考えながらやってみたらどうだい？」

「た…例えば？」

「墮作者死ねとか」

おおおおおい！！　それがあんたの楽しいことかああ！！

「うん」

う…うわあああん！！　もうヤマメさんなんて嫌いだー！！（バタン）

「とにかく、小悪魔なりに考えてみなよ」完全にスルー

「そ、そうですね……うーん…」

「まあ、じっくり見つければいいさ」

「今回は動かない大図書館なそうだ。

じゃあ、墮作者も既に帰ったので私も…」

「…あ！　ヤマメさん、楽しければ何でも良いんですよ！」

「？　そうだが…」

「出来れば良いんですけど、今度紅魔館の図書館に寄ってきてください」

紅茶を淹れて待っていますから」

「…それまでの間、

私がいつ来るかを楽しみに考えるってことかい？」

「そうですね…だ、ダメですか…？」

「適当に言っただのに当たりなのかい…」。

まあ、良いよ。そっちの主が賛成するなら来ても」

「ほ、本当ですか！！　ありがとございますー！！」

「別にお礼は良いよ、小悪魔」

「あ…それともう一つだけ…」

私のことはこあって呼んでもらえませんか…？／／／

「……」

「べ、別に深い意味があって言ってるわけ、わけではございませんので…！」

たただの友達として　／／／

「ふふ…じゃあ私も”さん付け”いらないね。

それじゃあ紅茶楽しみにしてるよ…こあ」ガチャ

「ふ、ふえ…？」

そ、そうですね…ヤ…ヤマメ…／／／

小悪魔のお悩み（後書き）

こあ「……」ぽ～

パ「ねえ、こあ……」

こあ「……」ぽ～

パ「……こあ？」

こあ「……ふえ？」

ど、どうしたんですか、パチュリー様？」

パ「紅茶…溢れてる……」

こあ「ああ！！ す、すみません！！」

今、雑巾を持ってきます！！」ダッ

パ（…どうしたのかしら？）

パチュリー・ノーレッジのお悩み（前書き）

はぁ……またヤマメさんに毒舌で返されるんだろうな…。

ヤマ「いつものことだろう?」

くっそ……いつか見返してやりたい…。

しかし、紅魔館広いな…。

パチュリー・ノーレッジのお悩み

うおおりゃあああ!! ふっかーっ!!

前回、ボロくそ言われた俺だがどうにか復活したぞおお!!

ヤマメさん、恐れ入ったか!!

「今回の相談者について読者のみんなに話したいことがある」

あれ? ヤマメさん聞いてる?

「先に話すと今回の相談者はパチュリー・ノーレッジ。

だが、みんなの知ってるように彼女は喘息持ちである図書館から動けない。

そこで今回は場所を紅魔館に移して行っ……以上作者の言葉だ」

あのー…ヤマメさん。

「しかし、ここは本当に本ばかりだねえ……」

ぐすん…無視されます…。

最近ヤマメさんが氷点下並に冷たいです…。

「いや、絶対零度並だよ。それより相談者をさっさと紹介しな」スッ

……そ、それでは今回の相談者は、

「あんたたち、図書館は私語厳禁よ」

はい。ヤマメさんが言ってたようにパチュリーさんです。

いやー、すみませんパチュリーさん。約十分くらいそれ解除しても
らえませんか？

「嫌だと言ったら？」

ヤマメさんがマジ帰っちゃうのでお願いします。

「こあの話だと、紙で会話したとか言っていたんだけど…」

今回、その紙もないから喋る手段がない状態です。
そこそこ本当によろしくお願いします！！

「……まあ、十分くらいなら…」

うつ…ありがとうございます、パチュリー・ノーレッジ様ああ！！

「チツ…帰れなかったね…」

それでは早めに、パチュリー様ああ自己紹介お願いします！！

「様をつける必要はないわ…」

「名前は紅魔館の図書館に在住しているパチュリー・ノーレッジ。普段は本を読みながらゆったりと生活しているわ。ちなみにこの本の知識はほとんど頭に入ってるから、分からないことがあつたら答えるわ」

ほお…凄い自信だな。

じゃあ本の知識とは関係ないけど、俺の分からないことを答えてくれませんか？

「何かしら？」

ここにある本は何冊あるの？

「776915冊よ」

……マジっすか。

「ええ、本来は魔理沙の盗んだ12398冊を足して789313冊なんだけどね」

………大図書館スゲエよ。

「魔理沙の盗んだ冊数も覚えてるのかい…」

「はあ…そろそろ止めたいんだけどね…」

もしかしてお悩みって…それ？

「そうよ。私の悩みは…」

魔理沙がほぼ毎日この本を盗んでくるから困ってるわ

「捕まえられないのかい？」

「私は素早い相手には弱いわ。
こゝに頼んでも—」

「パチュリー様、紅茶入り…!!」

ガシャン!!

「これだし…」

ドジっこあですしねー…。

「ヤ、ヤマメ!?!?!」

「お邪魔してるよ、こゝあ」

…あれ? 二人の呼び方ってこれで当たってたっけ?

↑前回、途中

退室のため知らない。

「く来るの、ははや早くないですか！？／／／／」

「今回はそっちじゃないよ。ここに墮作者もいるだろう？」

「え？……あ、ホントだ」

えー！！　すぐ近くにいるのに普通気づくでしょ！？

「それよりこあ。またティーカップを割ったのね……」

「あ……すみません！！　すぐに片付けるための箒を持ってきます！
！」　ダッ

えーっと……ヤマメさん。前回何かあったの？

「別に。それより今はパチュリーの相談だろう？」

あ、そうでしたね。

「どうすればいいかしら？」

「やや賭になるけど、盗むことを無視するんだね」

「無視？」

「そして、罪悪感を持たせる。

まあ、彼女が持つかどうか分からないけど、いつもと違うという変化は気づくと思うよ」

「なるほど……いつもことが変化してしまうと、自分も無意識に変化してしまうってことね」

盗むのが当たり前の思考から、盗んだらいけないって思考に変わる……か。

「「……」」

な、何だよその顔は？

「いや、そこまでの思考に良くてどり着いたなって……」

「あまり頭が良くない方だと思ったから正直戸惑ったわ
これが変化というやつね……」

てめえら酷すぎるだろー！！

「……こんなもので大丈夫だったかい？」

「ええ。少なくとも対策が取れそうで助かったわ」

こいつらの酷さに最後泣いた……。

ボタン

「はあ…はあ…」

あ、こあもちょうど良く帰ってきましたね。

「やっと…箒持ってきました…なぜか距離が遠かったですけどね…」

「？ おかしいわね。そこまで距離はなかったはず…」

ボタン！！

「はあ…はあ…やっと追い付いたぜ！　こら、私の箒を返せ！」

……なるほど“魔理沙”の箒を持ってきたか。

「ふええええ！？　いつの間に！？」

「また凄いドジをしたね…」

「いや……良くやったわ。こあ、それを貸しなさい」

「え？　は、はい…」

「魔理沙…あなたの箒を返してほしかったら、今まで盗んだ本を全て返しなさい」

「ちょ…わ、私は借りてるだけだぜ！」

「じゃあ私もこれ借りようかしら？」

「そ、それは困るぜ！..」

「ふ〜ん…私も困ってるんだけどね…」

「うつ…」

……これは凄まじい反撃ですね、ヤマメさん。

「まあ、私が相談で答えるまでもなかったね。もともと頭は良い方だし」

そうですねー。

「散々あなたの弾幕にも当たってきたから、こっちも無条件で当てようかしら…」

「か、勘弁してくれ……」

「さて、巻き込まれる前に私は帰ることにするよ」

「あ…ヤ、ヤマメ。紅茶は…／／／／」

「今回は無理そうだから、また今度お邪魔するよ」

「す、すみません…。用意でき…うひゃ！／／／／」

「また来るからさ…」ガチャ

こあの頭をさりげなく撫でながら帰って行っただぞ…。
まるで“気にするな、大丈夫”と言ってるみたいに…。
いつからイケメンキャラになったんだ？ ヤマメさん…。

「…／／／／」ぼ…

えーっと…とりあえず次回はここの主うーです。

パチュリー・ノーレッジのお悩み（後書き）

レ「騒がしいわね。どうしたのパ」

魔「ど、どうすれば返してくれるんだぜ…」

パ「私の本が戻ってくるまで」

魔「だから借りて」

パ「確か…うふふふ…だっけ？」

魔「や、止めろー！！」

パ「うふふふ。うふふふふ…」

魔「や、止めてください！！ お願いです、パチュリー様！！
これ以上、これ以上黒歴史に触れないでくださああい！！！」

こ「……／／／」ぼ～

レ「何これ…一体どういう状況…？」

レミリア・スカーレットのお悩み（前書き）

今回は相談じゃなくなる可能性があるのをご注意を！！

ヤマ「はぁ……」

レミリア・スカーレットのお悩み

ふう…やっぱり元の場所は落ち着くね。

「私はあまり落ち着かないね…」

そう言わないでくださいよ。少なくとも前回の紅魔館よりは良いでしょう？

「変わらないね」

はあ…少し改良する必要があるかな…。

まあ、それはさておき…ヤマメさん！ 今回の相談者は大物ですよ

「……誰だっけ？」

登場させたほうが早いですね。 それでは今回の相談者は…

「ふふ…レミリア・スカーレットよ。みんな待ったかしら？」

遂にご登場のレミリアさんだー！！

「……私的にはめんどくさい奴か」

「あら、こんな狭苦しい場所に呼んどいてその対応はないんじゃないかな
いかしら？」

おお…珍しくレミリア嬢にカリスマが…

「ふん…私はいつもカリスマに溢れてるわよ。あなたたちはどうい
う目で私を見てるかしら？」

「右頬にケチャップを付けてる子供」

うー

「何をふざけた……え？」

あ、本当だ！ ケチャップが付いてるぞ！！

「ちょ…大声で言わないで…」ボソ

何で？

「みんなに私がカリスマがないって思われるでしょうが！」ボソ

もう、おせーよ

「ちなみに左頬には、クリームが付いてるよ…」

「ええ！？ だ、誰か鏡貸して！！」

「はい、お嬢様！」

「う、うわああ！？ 咲夜！？」

さすが主に忠実なメイド長。お嬢様の危機に素早く現れるとは…

「ま、まあ良いわ。とにかく咲夜、鏡を」

「私がお嬢様の鏡になれば良いのですね？ 分かりました」

「え？ な、何を言ってるの咲夜…？ 後、何で近づいて来てるの…？」

「お嬢様の食べ残しを私が綺麗に取り除いて差し上げましょう…」

「じじ自分でやるわ…。だから、そんな近づいて来ないでくれるかしら…？」

「遠慮しなくて良いですよ。きっちり取りますから…」

「ただだからって…何で顔を近づけるの…？」

「分かってらっしゃるくせに」ペロ

「ひゃうー！？／／／」

「ふふふ…まだ付いてますよ、お・じょ・う・さ・ま」ペロ

「う、うー！！／／／」

あゝあ……またメイド長が暴走してるよ。誰のせいであんなになったんだか…。

「まったくだね」

あんたのせいだろ！

「さて、遅くなりそうだから私が勝手に吸血鬼の自己紹介をしておくよ」

誤魔化したよ、この人…

「今回の相談者は、紅魔館の主で吸血鬼のレミリア・スカーレット。普段は吸血鬼の特性なのか、朝に寝て、夕方頃に行動してるらしい。」

余談だけど、カリスマは毎回のことながらブレイクしているらしいよ…」

「う、う…」

「~~~~」

お、どうやらホット・イズ・タイムは終わったらしいぞ。

「たださえ暑いのにそんなにイチャイチャしないでくれないかい…？」

「じゃあ助けなさいよ、あんたたち！！」

まだ、死にたくない。

「溶けたくない」

「男の方はまだ何となく分かるんだけど、土蜘蛛は余裕ありそうねえ！？」

「私みたいな下位妖怪がそのメイド長に太刀打ち出来るわけないだろう？　たださえナイフにやられた」

「あら、何回もかわしていたわよね」

「その時は私の双子の妹がやっていたのさ」

なにその嘘！？

「へ…：咲夜のナイフをね…。これは執事にさせるほどの出来だわ」

「かわしたくらいで何をそんなに關心してるんだい？　後、私は女だ」

「人間で言うなら三本の指に入る咲夜のナイフを避けきるなんて中々の実力者よ。是非、紅魔館の執事で働かせたいわ」

「やだ。それと私は女だ」

まあ、ヤマメさんはめんどくさがり屋だから、そう簡単には動かないでしょうね。

「……もしかして、お前さんの悩みはこれと何か関係があるのかい？」

「そうよ」

<紅魔館のため安定した人材を探してるんだけど、宛がなくて困ってるわ>

「はあ…今のままで良いだろう?」

「咲夜が元に戻ってくれたら…ね」

いや、この人は元からまともじゃ

ズサズサズサズサ…

アッーーーーー!!!

「これはまともじゃないのかい？」

「何か最近やりすぎ感が目立つのよ。以前の失敗し続けるよりはマシなんだけどね…」

な、何本刺してやがんだお前え！！

「125本♪」

ざけんじゃねー！！

「……」

「現状では、咲夜はやりすぎ、中国は元々アレ、小悪魔はドジ、パチュリーは動かない、フランは能力のコントロールが出来ない…とかなり不安定だわ。だからそこに安定している者を加えたいんだけど…」チラ

「…何で私を見るんだい？」

「いや、執事としてお願いできない？」

「さっきも言ったがやだ。後、女だ」

「うー…そこを何とか…」うるうる…

「お、お嬢様カリスマが…」

「紅魔館のためならカリスマを捨てるわ!!」

「つか、最初からカリスマなんてないだろ」(笑)

ズサズサズサズササ!!

いってー!!!!

「私からもお願いするわ、土蜘蛛。私もこの性格を直そうと思って
るんだけど、中々止まらなくて…」

「お前さんをそうしたのは私だけだし、直す気ないだろ？」

「うー!! お願いヤマメー!!」

「お前さんは何でいきなり名前で呼ぶんだ？ 後、引っ付くな」

ヤマメたん、大好きだよー」

「死ね」

ズサツ↓ぐ、ぐおおおお!!

…と、こんなそんでヤマメさんは、次回の相談者が終わり次第、一週間だけ紅魔館の執事をするに…。何か今回、相談とはほど遠かったな！。

「はぁ……」

しかし、ヤマメさんの執事姿か……想像するとカッコいいなあ。

「お前さんの思考に執事姿の私を消せ」

す、すみません！　じゃ、じゃあメイド姿のヤマメさんを

「消せ……」

ひ、ひいひい！！　す、すみません！！（ボタン！）

「はぁ……次回は今回の妹だ……」

レミリア・スカーレットのお悩み（後書き）

レミ「…というわけで、一週間だけその土蜘蛛を雇うわ」

中国「おお、お嬢様も良い所つきましたね！」

咲「当たり前よ。このお方を誰だと思ってるの？」

パ「かりすま（笑）」ボン

フ「新しいおもちゃかー♪ 楽しみだなー♪」

こ「や、ヤマメの執事姿……／＼／＼」ぼゝ…

フランドール・スカーレットのお悩み（前書き）

ヤマ「……何でこっちは更新できるんだい？」

こっちはあんま支障はないのさ！！ それより執事頑張っ
てねー♪

ヤマ「気体になって消えてしまえ」

ひっどー！！

フランドール・スカーレットのお悩み

さーて、今回が紅魔郷編ラストの相談者フランです！ 準備は良いですか、ヤマメさん♪

「……」

もう、いい加減元氣出してくださいよー♪ たった一週間じゃないですか♪

「私にとっては一週間もだね」

…とヤマメさんはかなり落ち込んでますが、今回の相談者の笑顔でその気持ちを壊してもらおう！！

ドカアアアアン！

「わーい♪ 壊して良いんだー」

いきなり壁をぶち破ったのご登場は………ておい！！

「ぎゅっとして…」

ドーーーーン！！

あー！！ 俺の昼食として食べる予定の鳩。ブレーの大半があああ
あ！！

「お前さんの朝食はお菓子かい……」

「わーい」

くっそおお！！ ヤマメさん、一緒に止め

「意外においしいね、これ」サクサク

呑気に食べてないで、止めるの手伝ってくだーい！！

はあ……はあ……何とか止まったぜ……。

「ぶっ！ まだ壊しきってないのにっ！」

ここが全壊するからね！ 頼むから止めてね！

「いつそのこと全壊すれば良かったのにね……」サクサク

酷いこと言っなー！！ 後、食べるなー！！

「あ、おいしそっ！」

「一つどつぞ」

「ありがと〜♪ おいし〜♪」サクサク

昼食が消えるうつうつ!! 頼むから食べないでえええ!!

「作者、うるさい(っ)」「サクサク

り、理不尽だああああ!! (ボタン!)

「…いつも通り作者がどっか行っただから、さっさと自己紹介始めて
良いよ」

「うん、分かったー♪」

「私の名前はフランドール・スカーレット、フランドールは堅苦し
いからフランって呼んでね♪

以前までは紅魔館の地下室に閉じ込められてたけど、赤い霧の異
変以降はあそこから出れるようになって、今は紅魔館のみんなと楽
しく、やりすぎちゃうこともあるけど遊びながら生活してるよ♪

うーん、後は……あ! 私と遊んでくれる人、大、大、大募集〜♪」

「……まあ、最後のは人間は止めておこうね」

「ぶ〜…じゃあ代わりに遊んでくれる? えーっと…」

「どの道、一週間だけ遊ぶことになると思うけど。ちなみに名前は黒谷ヤマメだ」

「え？ 何で？」

「……明日になれば分かるんじゃないのかな？」

「教えてよー！」

「そんなことより、鳩サ。レーにはレミリア型もあるみたいだね」

「え？ ほ、本当だー♪ お姉さまそっくり♪」キラキラ

（話題が逸れて良かったよ…）

おらー、グレながらも戻ってきましたよ。相変わらずの墮作者ですよ。

「「……」」

ふっ、何とでも言う方がいいさ。俺は不良になり下が

「フラン、お前さんの悩みは何だい？」

「えーっとねー…」

あれ？ お二人さん？

「あ、これだよ」

おい。聞いてますか…。

「それじゃあ、フランの悩みは…」

も、元に戻りますよ……ぐすん。

<紅魔館のみんなに今までのお礼をしたいんだけど、何をお礼にしたら良いか思い浮かばない…>

うーん……まあ、確かにそう簡単に決まるものではないな。だけど、何でこれを…？

「私って面倒かけてばっかだし、少しでもお礼がしたいから…」

「…フランは優しいね。その気持ちだけでも充分にお礼になるよ」

「それでも私なりに何かお礼したいんだ…」

「私なりに…か…」

意外に頑固だな。これに対し、ヤマメさんはどうするんだろ？

「……物でも料理でも何でも良いから、何か作ってみたらどうだい？」

「作る？」

「フランの場合だと難しくなるけど、それが一番だと私は思うよ」

でも、作らせることで何か意図があるんですかい？

「……今まで能力のせいで壊してきた。でも、今はそれを制御して何かを作れる……つまり、自分が成長したことをお礼にするってことさ」

ほお、なるへそ。

「でも、そんなに喜んでくれるかな……？」

「今まで本当に面倒を見てきた人にとっては自分のことのように喜んでくれるよ……。紅魔館の連中にとってフランは家族なんだから……」

「……」

「まあ、やるかどうかはフランの判断に」

「やる！ 私何でも作るよ……！」

「ふふ……じゃあ私も協力するよ。一人じゃ大変だと思うしね」

「本当！ ありがとう」

家族か…相変わらず良いこと言うな。よし、俺もヤマメさんとかぞ

「寄るな変態」

Σ（「□ 111」）

「ヤマメ、バイバーイ」

「ああ、気をつけて帰んなよ」

変態……変態……

「ところで堕作者。次回について言っておくことがあるんだろう？」

へんた……ああ、そうでした！！

今回は妖々夢の相談者に入る前に、番外編でヤマメさん紅魔館での執事編を一、二話入れたいと思います！

「……思っのだが、これは相談じゃないのかい？」

き、気にしたら負けだ！！それに紅魔館のメンバーと別れるのは寂しい！！

（本編ではそろそろ出てくると思っただけ…）

とにかく、次回はそういうことで。そして、番外編が終わったら本来の相談に戻ります！

ちなみに相談者は、冬にしか現れなくて、心の器がふとましい人だ
！！

「お前さん、絶対凍らされるね…」

フランドール・スカーレットのお悩み（後書き）

レミ「だ、大丈夫かしら、あの子……。もしかして無事に着いてないってことは」

フラ「ただいま♪　ちゃんと行けたよ♪」

レミ「ふ、フラン！　ちゃんといけ……。じゃない、そんなこと言わなくても分かってるわ」

フラ「うん、ちゃんと行けたよ♪　心配してくれてありがと♪」

レミ「べ、別に心配なんかして」

咲「妹様が行ってからずっと心配してましたよ♪」

レミ「咲夜ああ!!」

番外編 紅魔館の執事 前編（前書き）

ごめんなさいです！ 一ヶ月半も考えてしまいました！

ヤマ「一生、書かないでほしかった…」

……ま、まあ、ヤマメさんの毒舌もさて置きましょう。
今回は全部、第三者視点で行きたいと思います。ちなみに俺は出ません。

ヤマ「……」ぱん♪

あんたはクラッカーを引くほど嬉しいのかー！！

ヤマ「それでは本編どうぞ…」

番外編 紅魔館の執事 前編

霧の湖の近くに建っている館、紅魔館。

主のレミリア・スカーレットを中心に、そこにはメイド長、門番、司書など多くの者が、主や館のため日々職を全うしていた。

そんな中、今日、新たな職に就く者がいた…。

「……つとそんなわけで、一週間だけここで執事の仕事をすることになった、黒谷ヤマメよ。ヤマメ、みんなに自己紹介を…」

「……」

黒谷ヤマメ…元は地底に住み着いてる土蜘蛛。だが、どういうわけかレミリアに気に入られ、執事の仕事を受け持つことになったのである。

現在、レミリアが自己紹介をするよう促してるが、当の本人は黙ったままだ。

「ヤマメ、自己紹介」

「…じゃあ、この服装をどうにかしてくれないかい？」

実は男性用の執事服を着せられたことに、もの凄い不満を持っていたのだ…。

「ダメよ。あなたはこれからその姿で仕事してもらうんだから」

「お前さんの趣味を私に押し付けるな」

「な、何よ、私の趣味って!!」

レミリアの言葉を見回し言った。

「実はこの主は男性の執事服を人に着せるのが趣味らしいぞ」

「ちょ!?! 何を――」

「それは初耳ですね! 初めて知りましたよ!」

「真に受けるな中国!!」

「貧弱な私でも着せられるのかしら? パチュリー万歳とか?」

「あなたは私をどういう目で見てるの!?!」

「レミリア様の趣味のおかげで……ありがとうございます! / / /
だから趣味じゃない!!」

「お姉様、人それぞれだから私は気にしないよ」
「うあああん!! さーくーやー!!」

四人に散々言われたレミリアはカリスマなしの状態で咲夜に泣きつく。

「うゝ…咲夜はそんなこと言わないよね…」うるうる…

「はい。その代わりお嬢様は私のものです…」だらだら…

何とも怖いメイド長である…。

「一目目」

「いやー、それにしてもいい天気ですね」
「…そうだね」

そんなヤマメの初仕事は、門番の監視。

近くに誰かを置けば、流石の美鈴も寝ないだろうと主（笑）が考え、ヤマメを置いたのだが…

「ぐー…ぐー…」
「………」

ものの十分で睡眠。近くに人を置いても美鈴はこの有り様である。

「………」

それを横目で見たヤマメは、あること実行する…。

「これでよしと…」

そして、あることを終えたヤマメはそのまま紅魔館に戻って…

「待ちなさい」

が、咲夜に捕まる。

「まだ十分しか経ってないのだけど？」

「ここの門番は優秀だから私は必要ないね」

咲夜は美鈴を見る。

「どう見ても寝てるし、優秀なんてとても呼べないわ」

「横じゃなく正面から見たらどうだい？ 本当に優秀だから」

咲夜は少し眉を吊り上げながらも、言われた通りに美鈴を正面から見てみた。

「ぷっ……た、確かに…優秀ね…」

「侵入者もこんなのが正面にいたら紅魔館が遠く感じるよ」

美鈴の顔を見て吹き出した咲夜に、ヤマメはマジックペンを渡す。

「私ので充分だと思うけど、足りないんだったら付け足してくれ」

「い、いや…充分だと…思うわよ…」

そう、あることは美鈴の顔に落書きをしてたのだ。咲夜が腹を押さえるほどの落書きを…

「確かに……」「うふふ」は……あの侵入者に……答えると思うわね……」

その顔には「うふふ」の文字がびっしりと……これは侵入者（魔理沙）が答えるであろう落書きだ……。

「基本的に侵入者は魔理沙だけだし、これで充分だと私は踏んだのさ。それじゃあ、私はフ란の様子でも見に行ってるよ」

今度こそヤマメは紅魔館に戻って行った……。

「まあ……ぶっ……今回は中国だけで……充分……うふふ……」

この日、侵入者が来ることはなかったと言う……。

「二日目」

「ヤマメさん、昨日は酷すぎますよ……！油性でなかなか取れなかったんですからね……！」

「メイド長を証人に立てようかな……」

「眠っていた私が悪かったです……！」

二日目、今日もヤマメは門番の手伝いだ。
昨日の反省から流石の美鈴も、今日は眠らないように心がけてる
ようだ。

三十分後…

「う、う……暇で今でも眠りそうです…」

「昨日やられたお前さんは三十分で弱音を吐くのかい…」

その心がけも門番という退屈な仕事には勝てないようだ…。

「ヤマメさーん……何か暇を潰せるようなことはありませんかー…」

「はぁ……仕方ない」

ヤマメは空を見上げ考える…。

「……スペカしりとりでどうだい？」

「す、スペカしりとり？ それって難しく」

「マスタースパーク」

「聞いてくださいよ……」

そう言いながらも考え出す美鈴。

「く……く……グラビティービート」

「ドールズウォー」

「え……えっと……お、オールトクラウド」

「ドラゴンメテオ」

「お……お……オーレリーズユニバース」

「スターダストレヴアリエ」

「うっ………エスケープペロシティ！」

「イリユージョンスター」

「勘弁してください！！早すぎます！！」

ぱっぱつと答えるヤマメに、美鈴は涙目で訴える。

「それに何でほとんど魔理沙さんのなんですか！？」

「知らないよ。張本人に聞いてくれ」

「私が何だぜ？」

「確かに張本人が……いるんですか！？」

しりとりをしている間に、いつの間にか魔理沙が来ていたらしい……。

「魔理沙。このしりとりに勝てたら、門番が客として見てくれるぞうだ」

「つまり自由に出入りできると……？」

「そうだと思う」

それを聞いた魔理沙はニヤリと笑う。

「そうか……それは是非勝たせてもらうぜ！！」

「そんなこと言ってませんからね！！」

「弾幕ごっこよりはイーブンに持ち込めて良いと思うけどねえ……。じゃあ私はこれで……」

「そんな条件があるのにイーブンもへったくれも……って戻らない

でくださいよー!!」

涙目の美鈴とやる気満々の魔理沙を残し、ヤマメは紅魔館に戻って行った…。

結果はどうなったか分からないが、この日も侵入者が来ることはなかったと言う…。

「三日目」

三日目、今日は仕事が変わり、図書館の司書の手伝いだ。主な仕事内容は、パチユリーに紅茶を淹れることと、時間がかかる大量の本の整理だ。

「この本はどこに入れるんだい？」

「この本はですね……あそこです。これで終わりです!」

普段なら四時間かかる本の整理……いや、小悪魔がドジをしなければかからないであろう時間。

だが、今回は…

「ヤマメ、ありがとうございます！ 二時間も早く終わりましたよ！」

ヤマメがカバーしたのもあり、普段より二時間も早く終わったそうだ。

「本当にありがとうございます！！」

小悪魔が思いつきり頭を下げる。

この時、位置が悪かったのか、やっぱり小悪魔がドジっ子だったのか…

ドンー！！

「い、痛！」

本棚に思いつきり頭をぶつけ、

「…う、うわあああ！！」

当たった衝撃で棚に整っていた本が、雪崩のように落ちてきた…。

「……っと」

そんな中、冷静にヤマメが本の雪崩が届かない自分側に小悪魔を引っ張った…。

そのおかげで小悪魔は額のこぶ以外の怪我はしなくて済む。

「……大丈夫かい？」

本の雪崩が収まったのを見て、ヤマメは静かに聞く。

「す、すみません。私のドジのせいで本が…」

「気にしないさ。私はこあが何回ドジをしても手伝うよ…」

「や、ヤマメ……ありがとうございます…／＼／」

優しく言ってくれるヤマメに、顔を赤らめた小悪魔は本日三回目のお礼を言う…。

「……それにしても、そのこぶは痛そうだね…」

「え？ ひゃあ！／＼／」

さっきから気になっていたヤマメは、自分の手を小悪魔の額に置く。

「ちょっと腫れてるねえ……救急箱を持ってくるからちょっと待ってくれるかい？」

確認し終わったヤマメは手を額から放そうとする。

「……こあ？」

が、小悪魔の両手に止められる…。

「や、ヤマメ……もう少しだけこのままでも……良いですか？／／」

「別に良いけど……嫌じゃないかい？ 私の能力もあって…」

「能力なら…もつかかってます…／／／」
「……？」

ここで結論、フラグ建てるなよ執事…。

「四日目」

「ヤマメ、紅茶お願い」
「はい…」

四日目、同じく司書の手伝い。
現在、パチュリーに紅茶を淹れるヤマメ。小悪魔が毎回やってる

ドジをヤマメはしないので安心して見てられた。

「…どうぞ」

「ん、ありがと…」

（花に水をあげてるようだね…）

ただ、時折ひどいことは考えるようだが…

「……今、失礼なこと考えなかった？」

「いや、別に、これはなんの本……ですか？」

話題を逸らすため、大切そうに机の上に置いてある本を指差す。

「え！？ い、いや、ただの本よ！！」

なぜかパチュリーは、それを慌てて自分の方に引き寄せる。それがマズかったのか…

トン

「む、むきゅー！！」

引き寄せた先に、先ほど淹れたカップにぶつかり紅茶が零れる。まだそれだけだったら良かったが、淹れたて紅茶が彼女の手に当たったため、反射的に本を離してしまった。

「終わりましたよー……っておや？」

その本は小悪魔の懷に着地。

「何でしょう、これは…?」

そして、その本を開く小悪魔…

「こあああああ!!」

パチュリーが叫んだときには既に遅し、小悪魔はその本の一部を
読んでしまったようだ。

「ば、パチュリー様………いつの間に魔理沙さんと結婚してたんで
すか!?!」
「内容をペラペラ話すなあああ!!」

この本にはパチュリーの妄想が永遠と書かれていたのである…。
ちなみに小悪魔はこれが日記だと思っている。

「す、凄いです………こんなことも魔理沙さんと………//」
「やーめーろー!!」
「ふえ!?! 喘息はどうしたんですか!?!」

本当に喘息はどうしたのか、パチュリーは全速力で小悪魔の所へ…

「こあ……その手に持つてるの放そうね」
「パチュリー様、子供がいるなら言ってくださいよ!!」
「あなたにはこれ以上は話させないようにするわよ!? とにかく
はーなーせー!!」

強引に奪い返そうとするパチュリー…。

「最後まで読ませてくださいよ！！　これ読んで感動したんですから！！」

こんな妄想本に引かない小悪魔…。

「……はあ」

ヤマメは思った。この紅魔館にまともな奴はいないのかと…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6424t/>

ヤマメのお悩み相談

2011年11月14日23時03分発行